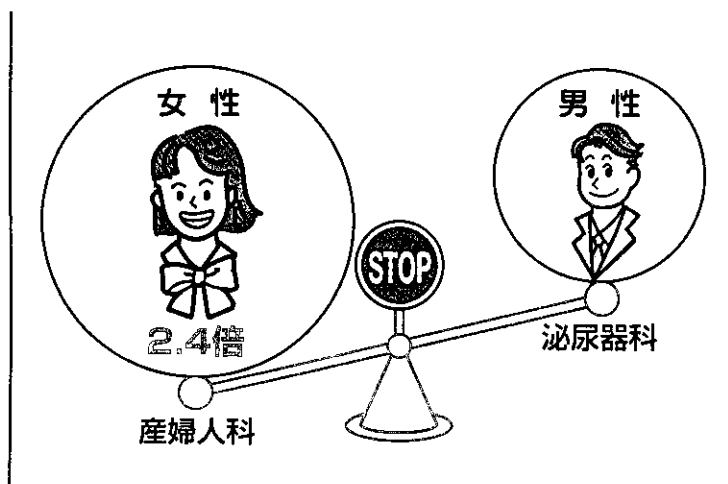


無症候性STD時代
 〈性器クラミジア感染症・性器ヘルペス〉



いるのです（淋病も同じ）。

しかも、ここに報告されている症例の裏には、無症状で、診断されていない感染例が、この4倍もの人が、無症候のまま感染していると考えられています。ことに、感染例が女子に、そして若い人々に特に多いことに注目してください。

少し詳しく年齢別の罹患率を、1999年の厚生省性感染症調査班の集めたデータで検討してみますと、右下の図のようになっています。これで見ると、症例数男女比は1：2.3と、断然女性に感染例が多いことがわかります。男性は軽い尿道炎でも、軽いなりに尿が滲みたりしてくるので、診療を受けることが多く、比較的治療されているのに比べて、女性の子宮頸管炎は、はっきりした症状が出ず、診療を受けないで放置され、長く感染を持ち続けている場合が殆どなのです。一部の人が、体調を悪くし、体の抵抗力が落ちた時などに、初めて自覚症状が出て、医師を訪れ、そこで、やっと診断されるという実態が多く、女性側に感染が積み積み増え、このような状況にまでなっているといえます。

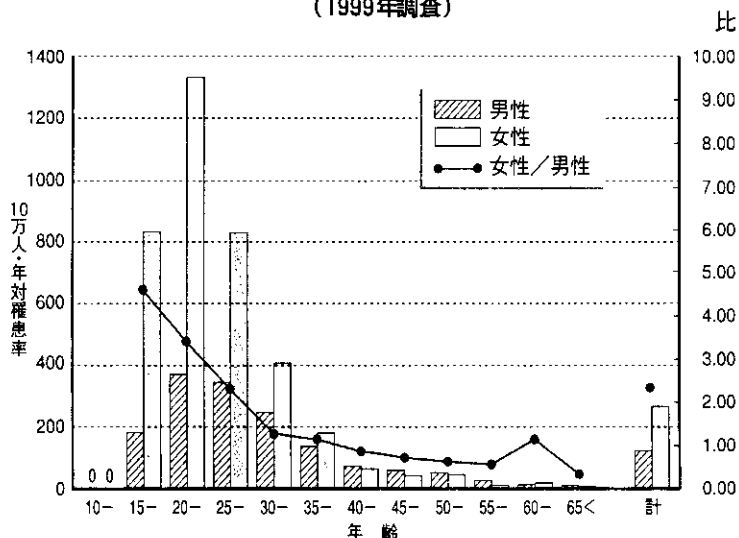
女性の年齢別分布をみますと、一番感染率が高いのは20-24歳で、次は“15-19歳の若い女性群”なのです。僅かですが、25-29歳よりも感染率が高いことが注目されます。一般市民の中の若い10代の女性の中に、クラミジア感染がこれ程広がっていることが明らかになったのは、驚異的なことでした。そのた

め、ようやく“若い10代の女性が危ない”とテレビや新聞などが取り上げるようになり、社会的にも注目されるようになりました。

20-24歳女子で、クラミジアと診断された症例は、この疫学調査成績では、その年齢の人口の1.3%にあたります。しかもその他に無症候のものが、この4倍あると推定されており、それを足すと1.3%の5倍の、即ち6.5%、15人に1人がクラミジアにかかっていることが推定されています。また、同様の計算をすると、15-19歳代女性では、5%即ち、20人に1人が感染しているということになり、かなりの大流行と言うことができます。このことを、一般の女性は、殆ど知らないでいるのです。一方、男性でも、今回の調査による報告数と同数の無症候症例が陰にいる、と推定されています。

それらを考慮に入れて計算すると、日本の若者から成人までの全人口内における性器クラミジア感染例数は、男性約13.8万人、女性81.9万人、計約96万人という、膨大なクラミジア感染例があることが推定されます。しかもこの推計データは、特に多数の人々と関係をもつ、性生活の活発な人々ばかりでない、一般の人口全体を対象とした推計的統計であり、いかに普通の人々が、知らないうちにクラミジアに感染してしまっているかがわかってもらえると思います。これが、なぜ国民的大問題として注目されずに放置されているのでしょうか？ クラミジア感染が、いかに国民の“性の健康”をおびやかす、重大

性器クラミジア感染症全国疫学調査
 (1999年調査)



な衛生上の問題であるかを考えてもらいたいと願っています。

よく、クラミジア感染症は致命的な病気ではないので、それほど大騒ぎをしなくても、という人がいます。しかし、放置しておく、かなりの人が知らない間に不妊症になりますし、たとえ妊娠しても、母子感染で赤ちゃんに感染し、大きな問題をおこしていることを忘れないで下さい。

しかも、この性器クラミジア感染症にかかっていると、次に述べる、やはり無症状のエイズに、3倍も4倍もかかり易くなるという、エイズ問題とかなり密接につながり、深刻な事態にたちいたる可能性があります。“クラミジアの陰にエイズあり”なのです。

性器クラミジア感染症の流行度

女性の推定罹患症例数	
合計 16万3737.7 × 5 = 81万8688.5人	
20～24歳	
有症状例	6万1685人
無症状の潜在例—その4倍	24万6742人
推計罹患例	30万8428人 (6.4%) 1/16人
男性の推定罹患症例数	
合計 6万8772.8 × 2 = 13万7545.6人	
女性：81万8688.5人 男性：13万7545.6人	
男女合計：95万6234人	

性感染症としてのエイズ

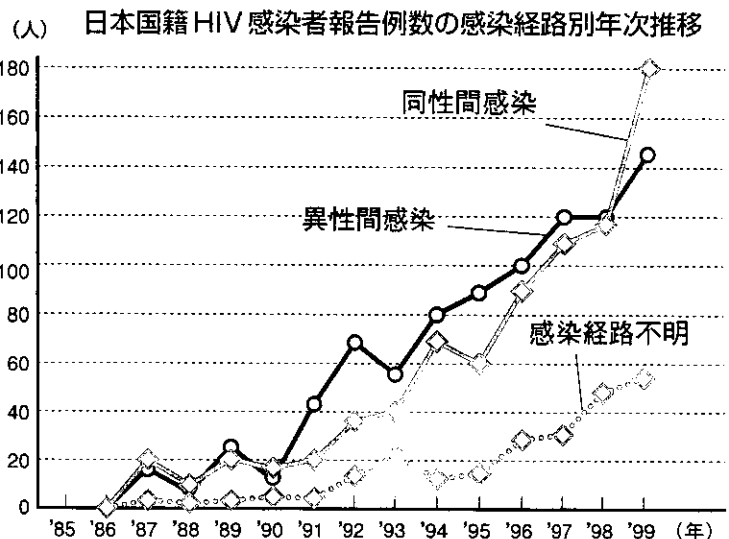
今までに説明してきたクラミジアの他に、淋病や梅毒、また、ウイルスによる性感染症である性器ヘルペスや尖形コンジロームなどもかなり広がっています。ことに、抗生物質で治療し易くなった性病と説明した淋病でさえ、性感染症に対する警戒心のない日本では、今や、どんどん増えているという、大変驚くべき状況にあります。その問題は後で説明するとして、ここでは、現在、世界的にも最も注目されており、症状もなく、感染者が無自覚のままセックス・パートナーに感染させるHIV感染/エイズについて説明しておきたいと思えます。

このHIV感染/エイズは、大々的なひろがりを見せており、WHOの報告では、今や世界中に3430万人の感染者がおり、1999年だけでも540万人の新しい感染者が出ている新顔の性感染症です。ぜひ人ごとと思わず、“身近に迫りつつある感染症”として関心をもってください。

今や世界的には、“性感染症/HIV感染（エイズ）”という表現が常識的になっており、エイズと他の無症候の性感染症と同じグループの感染症であるとの理解が、かなり行き渡っ

ています。

ところが、驚くことに日本では、“性感染症としてのエイズ”に対する関心が、きわめて低くなっているのです。これは、大きな問題点であり、非常に危険な状況にあると言えます。殆どの人は、エイズは自分には全く関係のない病気と思い込んでいるようです。また、“この頃はあまり話題にもなりませんね”などという発言もよく耳にします。では、本当に皆さんに関係ないのでしょうか？



“薬害エイズ”はきわめて特殊な悲しい事件ですが、その“薬害エイズ”も“性感染症によるエイズ”も、病気としては全く同じものなのです。

また、HIV感染／エイズを特殊な感染症のように考えて、一時みられたように、社会的に差別する風潮のあったことも、全く理解し難いことです。性感染症なので性交渉をもたない限り、特別な場合を除いて、人にうつすことは全くない感染なのです。日常生活上、普通の人々と何も変わりはないのに、特別視するのは不思議でなりません。社会的に持たれていた、HIV感染例は何か危険な人だ、などという偏見は、全く理由がないものであるといえます。厳しい病気と闘っている人々を、温かく支える福祉の立場を忘れないで欲しいと、強く主張しておきたいものです。そして、薬害エイズでも、また、性感染症としてのエイズでも、病気と闘っていることはまったく同じことなのです。

ところで、そのHIV感染／エイズは、日本でも今や性感染症として、異性間及び同性間の性交渉の中で罹っていて、13ページにある図のように、かなり急速に症例が増えつつあります。ことに若い日本人男女が日本国内で感染している例が増加していることが注目されているのです。

最も重大な問題は、HIVに感染してもCD4リンパ球が著しく減少してしまうまでは、殆ど無症状のため、抗体検査をしない限り、本人も全く気付いていないことが殆どなのです。そのため、無自覚のうちに、精子や膣分泌物の中にあるウイルスをセックス・パートナーに感染させていることも少なくないのです。

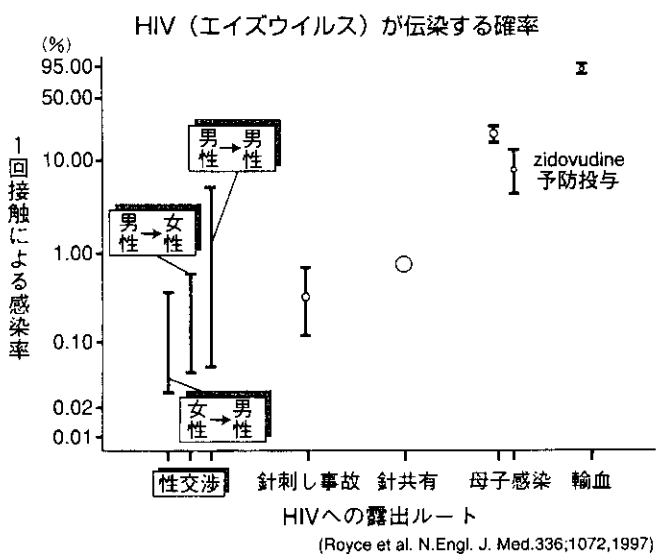
少しでも多くの人々が、エイズを無症候の性感染症の一つであることを正しく理解して、自分のため、また、パートナーのためにも、進んでHIV抗体検査を受けるようにしたいものです。HIV抗体検査がもう少し普及し、隠れたHIV感染者が感染を知り、治療をするようになれば、日本の流行予防対策はなかなか成果を上げ

ないのではないのでしょうか。近年の医学の進歩により、エイズも早期に発見し、治療すれば、社会生活を続けることが可能となり、慢性疾患に近いものになったという認識になりつつあります。そのため、外国では積極的に検査することがかなり普及しているのに、日本では、むしろ検査する人が減りつつあるのが心配でなりません。

また、HIV感染／エイズは性交渉では感染しにくい、という解説をときどき見かけます。性交渉によるHIV感染は、下図に示すように、確かに“針刺事故”と同じような高い感染確率なのですが、なぜか、病院で起きた、看護婦さんがエイズ患者さんに注射したあと、その針を誤って自分の手などに突き刺してしまった“針刺事故”では大騒ぎをするのに、同じ程度に感染する性交渉での感染を少しも心配しないのが不思議でなりません。

パートナー同士が、無症候感染している可能性を考えて、気を付けて慎重に、コンドームを使っでの予防対策を考えるべき時がきているのです。

“性感染症としてのエイズ”は、日本では、感染者の将来予測数でも1万人に1人ぐらいとなっています。しかし、これまで述べてきたように、その数は徐々に増えてきており、かなり身近に迫りつつある感染症であるとの認識をもってほしいものです。



他の感染症はエイズにかかり易くする

もうひとつ、特に忘れてはならないことは、今まで説明してきた“エイズ以外の性感染症”であるクラミジアや淋病、梅毒、ヘルペスなど“エイズ”が、お互いに密接な関連性をもって、感染がひろがっていることです。

クラミジアや淋病に感染して局所が荒れている性器には、HIV（エイズ・ウイルス）がとりつき易いのです。ことに潰瘍が出来る性器ヘルペスとか梅毒などは、なおさら感染しやすいのです。これらの他の性感染症にかかっている人は、性感染症としてのエイズに、普通の人より3～4倍も感染し易いとされていることを知っておくべきでしょう。

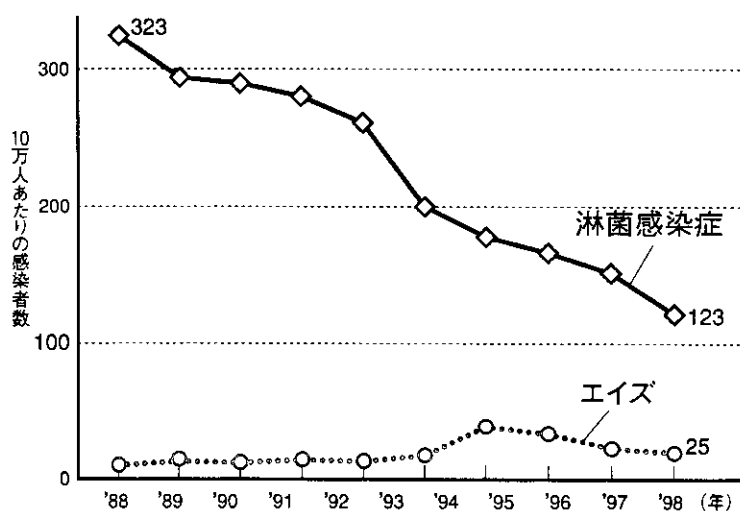
しかも、そのような性感染症に感染し易い、コンドームを使わない無防備な性生活をもっていることが、同じ性感染である無症候のエイズにも、同じように気付かないうちに感染する可能性が高いと言って良いのです。ですから、エイズが性感染症であることは知っていても、中には、他の性感染症に罹る程度ならば、大したことはないと思っている人もいるようですが、それが極めて危険な考えであることを自覚すべきでしょう。いつエイズにかかってしまっても決して不思議ではないわけです。

今や、世界の殆どの国々では、エイズ予防キャンペーンとして、とにかく“検査し易く、エイズと違って、たとえ感染していたとしても治療可能なので、検査することにあまり心理的抵抗のない、クラミジアや淋菌などの性感染症”の検査の普及につとめ、性感染症全体の流行抑制に力を注いでいるのです。また、性感染予防の基本であるコンドームの正しい

使用法の啓発普及にも、かなり精力的に努力しています。その成果として、下図のように、欧米先進国ではすでに、HIV感染流行を抑え込み、流行のピークは過ぎたとされているのです。

いまだにクラミジアや淋菌感染症が急増を続けている日本では、“性感染症としてのHIV感染”の現在の状況は、まだ少ないから安心だと言って、呑気に構えている間に、大きく広がる可能性がかなり高いのです。そのため、心ある諸外国のエイズ研究者達は、日本における淋病やクラミジア感染症が急増している状況を、エイズ大流行につながるのではと、大変心配しています。日本人自身が、性器クラミジア感染や淋病、梅毒などの性感染症の流行抑制こそ、“性感染症としてのエイズ流行予防”につながる対策そのものであることに目覚めるべき時が来ているのです。そのために、公衆衛生行政や医学界は、総力をあげて頑張っていくべきであるといえましょう。

アメリカの淋菌感染症とエイズの感染者数の年次推移



その他の性感染症

淋菌感染症

かつて性病の代表のようであった淋菌感染症も、ペニシリンなどの抗生物質普及のおかげで、昔から見ると大分感染例が減りはしました。

しかし、男性の淋菌性尿道炎としての淋菌感染症は、今もまだ残っていて、かなりのひろがりを見せています。症状としては、尿道から黄色膿汁が出て、強い排尿痛があるのが特徴です。

一方、女性の淋菌性子宮頸管炎も、通常は膿性の帯下（おりもの）がでるとされています。しかし、最近では、むしろクラミジア感染と同じように、殆ど症状がない感染例がかなり増えています。放置すると、クラミジア以上に、骨盤内感染症に発展し、不妊症になってしまいます。もう一つの問題点は、そのような無症状の感染女性からうつされた淋菌でも、男性が感染すると、激しい尿道炎を発生させることが注目されることです。

この淋菌感染症は、昔に比べ最近では症状が軽くなってきたとはいえ、やはり男性では、尿道の炎症は尿がしみて、痛みなどの症状がやすく、比較的早く診療を受ける人が多いので、公衆衛生学上、また、医学的にも管理し易い感染症となっています。

世界中の多くの国々では、コンドーム使用キャンペーンの普及や性感染症／エイズ予防意識の向上により、予防や治療対策が徹底してきており、殆どの先進国では、淋病感染例が最近急激に減って来ています。この淋菌感染症流行の動向が、その国の性感染症／エイズ予防意識がどの程度か示す、一番よい

指標とさえ考えられています。

ところが、日本では驚くことに最近、11ページの図のように男子の淋菌感染症が増加の一途をたどっているのです。これは、前にもクラミジア感染症の所で述べたように、最近、心配な、恐いエイズはもう性感染症としてあまり心配しなくていいというような、社会的風潮がひろがったため、性感染症に対する警戒心や予防意識がかなり低くなっていることによるといえましょう。この淋菌感染症の増加現象は、きわめて感染の可能性の高いフーズク街でも、コンドームをつけない、無防備の性交渉をする人が増え続けている風潮を反映している現象なのです。

しかし、それだけでなく、性の自由を楽しんでいる若い普通の女性にも、無症候感染をしている人がいるため、どんな場合でも、コンドームをつけないでいると感染してしまう可能性のあることを忘れないでください。

この淋菌感染症さえも増えているというデータは、如何に社会全体が、エイズを始めとする性感染症に対する恐怖感・危機感がなくなっているかを示しているといえましょう。最も管理し易い淋菌感染症でさえ、日本のように増えているのは、感染症学の常識からすれば、近い将来、エイズ大流行をおこす可能性が高いのではと、前述したように外国の研究者に盛んにいわれています。きわめて憂慮すべき風潮ではないでしょうか？ 日本は、今、大きな問題を抱えていると言えます。

梅毒

梅毒はコロンブスがアメリカからヨーロッパへもたらし、かつては世界的に大流行し、性病の代表とされていた性感染症です。しかし、そのさしもの梅毒流行も、ペニシリン出現後は影をひそめるようになって来ました。現在では、一部ではいまだに残っているものの、我が国の全性感染症のうち、0.8%程度に少なくなっています。ただごく最近、ペニシリンが他の性感染症治療に使われなくなってきたことの結果として、他の感染症と一緒に感染している梅毒が、他の感染症の治療後も残ることがあり、徐々にまた増えているとされています。そのため、最近

また、注目を要する性感染症となってきたといえます。感染後2、3週間で局部に小さな硬結ができ、それらが崩れて潰瘍となるのが特徴です。そして、2～3ヶ月後に特徴的な全身に梅毒疹ができます。

最近では、あまり局所に症状が出ないで感染している場合もありますので、そのような所見がなくても、梅毒血清反応で16倍以上の陽性であれば、無症候性梅毒として治療しなければなりません。既婚の妊婦での検査では、約0.2%（500人に1人）が梅毒検査で陽性になっています。

性器ヘルペス

女性に多い性感染症は、性器クラミジア感染症ばかりでなく、ウイルス性の性感染症である“性器ヘルペス”もその傾向が強いのです。報告症例数はクラミジアの約3割程度ですが、やはり男女比は1：2.4と、断然女性が多くなっています。女性に多いのは、感染しにくい皮膚で覆われている男性の場合より、女性では外性器や子宮頸部は、表面が感染しやすい粘膜でおおわれているためと考えられます。

この性器ヘルペスが問題なのは、局所にはっきりした病変がない時でも、性器からウイルスを排出していて、パートナーにうつす可能性があることです。特に女性の場合、性器が奥まっているために、小さ

な病変が見落とされ易いことも多く、また、膣の奥にある子宮頸部の病変は、まったく気付かれないうけで、パートナーにうつす可能性もかなり高いのです。

症状が出る場合の性器ヘルペスの症状は、性器に小さな水疱が出て、それが破れると潰瘍が多発し、それが2週間ほどつづき、消えます。ことに女性の場合、膣前庭に潰瘍ができると尿が滲みて、排尿時の苦痛に悩まされます。

この性器ヘルペスで厄介なことは、再発することがかかり多いことです。感染した患者にとっては深刻な問題をはらんだ感染症といえます。

尖形コンジローム(ヒト乳頭腫ウイルス感染)

良性型のヒト乳頭腫ウイルス（HPV）による感染で、性器に乳頭状の小腫瘍（できもの）が発生します。手や足の“イボ”も同じ種類のウイルスで起きるのですが、性器につき易い型のウイルスがあるわけですから。出てきた“でき物”は、通常それを切除や焼灼して取るので、感染したウイルスが根の所に深く残り、再発を繰り返すようになり、治療の難しい病気になることも少なくありません。やはり、かなり注意しなければならない感染症です。

一方、このウイルスの中には悪性型もあり、それ

が陰茎癌や子宮頸癌を発生させたり、時には口腔癌、咽喉癌の発生につながることもあるので、最近注目されている感染症です。

しかも、この悪性型ヒト乳頭腫ウイルスの感染流行が、若い人々の間へのひろがり大きくなり始め、その結果として、最近、子宮頸癌の発生が、かなり若年化を起しているといわれています。その為、子宮頸癌検診も今までの30歳からというのではなく、もう少し若い20歳代の人々から始めるべきであると考えられるようになってきています。

トリコモナス

膣トリコモナスによる感染は、女性では無症状の場合もありますが、半数以上は、薄い膿性のおりものや外性器のかゆみが出るような、膣炎を起こします。そして、性交痛や膀胱炎様の痛みが出ることも

時々あり、不快な性感染症の一つです。

男性も無症状のものから、軽い非淋菌性尿道炎症状がでるものまで、いろいろですが、女性より感染例はあまり多くないようです。

毛じらみ

毛ジラミの寄生により、陰部にかゆみができるのが特徴です。時には毛ジラミに刺された所が点状に紅くなることで気づくこともあります。陰毛に附いている虫卵か、または毛ジラミそのものを検出するこ

とで診断がつきます。

これも最近少なくなっているとはいえ、なかなかなくなるのは、やはり性にまつわる病気の宿命なのではないでしょうか。

“性の影”の予防

ここまで“性感染症罹患”問題を中心にして“性の影”の話を進めて来ました。しかし実際の性交渉をもつ場合、ピルを服用している場合は別ですが、服用していないとすればもう一つの大きな問題“望

まない妊娠”も加わる可能性があることも忘れてはなりません。性感染症と妊娠という、2つの問題が同時に起こることを考えながら、予防対策を実行しなければならぬのです。

正しいコンドームの使用

まず両者を予防するには“正しく”コンドームを使用することが肝要です。“正しく”と書いたのは、殆どの方が使用したと言っても、あまり効果のない、間違った着け方でしか使っていないからです。

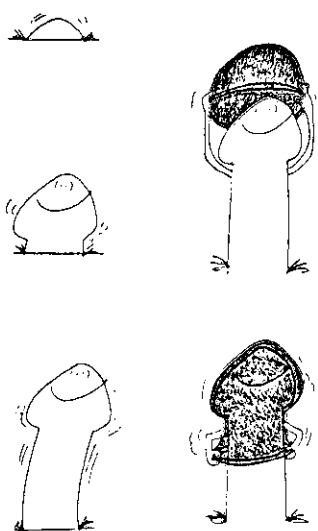
①射精直前にだけ着けるのは意味がありません。

このやり方では、〈避妊法〉としても完全ではないのです。意識しての射精する前でも、少し精液が出てることが少なくありません。また、性交渉の途中から着ければ良いと思っていて、着けるのが射精に間に合わず、失敗することもかなりあります。避妊のためにも、始めからしっかりとコンドームを着ける必要があります。

一方、〈性感染症予防の方法〉としては、その性交渉の途中から着けるなどということは、全く意味のないやりかたなのです。感染予防には、いわゆるオラル・セックスによる口での接触を含めた、すべての粘膜接触の、始めから最後までつけていなければ、いつ病原菌がうつるかわからないのです。最近はオラル・セックスで性感染症になる場合が、かなり多くなっています。感染予防の立場からいっても、オラル・セックスを含めて、始めからコンドームを着ける必要があります。

②“破ける”ことのないように、正しい装着法を覚えることも大切。

コンドームの破損率は数%とされており、注意をしていないと危険ですので注意してく

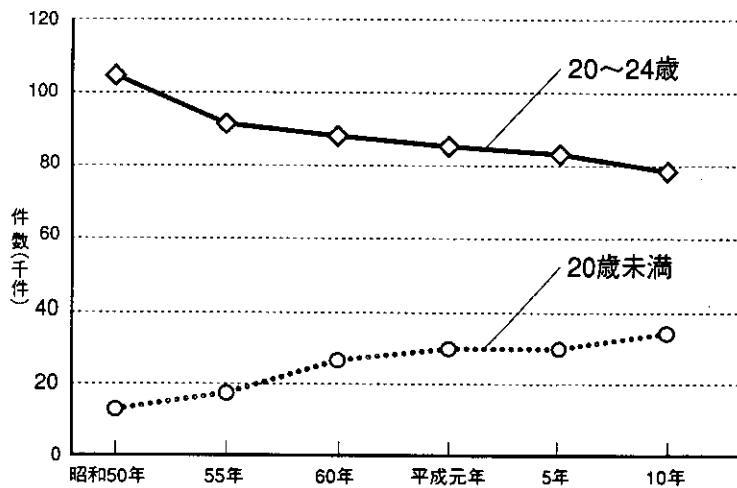


ださい。詳しいことはここでは長くなるので、添付された説明書を必ず一度はきちんと読んでおいて、いつも正しい方法を必ず実行してもらいたいと思います。ことに粘潤剤として油性のもの、たとえばベビーオイルやクリームなどは、ゴムを弱くして破れやすくするので、必ず水性のジェリーを使用するようにしてください。またコンドームがはずれることもかなりありますので、それも失敗のもとになります。

コンドームを自分では正しく使っていると思っても、必ずしも完全でないことが多いわけですから。そのため避妊に失敗することが多くあり、コンドーム使用例の5～10%は“望まない妊娠”をしてしまうとされています。

現在、20歳代を中心に、人工妊娠中絶手術は性の

人工妊娠中絶件数



平成10年 母体保護統計報告・厚生省

自由化を反映して、増加傾向がみられます。割合は、15～19歳で女性1000人あたり7.9人、20～24歳で17.1人、25～29歳で14.7人とかなり高率といえます。いかにして“性の大きな影”であるこの望まない妊娠を避けるようにするか、若い人達は真剣に考えねばなりません。

また、たびたび言うようですが、コンドームを正しくつけない無防備の性交渉は、性感染症に感染する可能性が高いのです。コンドームなしでの性交渉は必ず避けなければなりません。

ピルの正しい使用法

コンドームでの避妊の失敗例が多いため、避妊用経口ピルが用意されているわけで、今後、“望まない妊娠”の危険にさらされている若い人々への普及が強く望まれるところでしょう。

しかし、ピル使用にもいろいろの問題点があります。詳しくはピルの使用ガイドラインを読んだ上で、服用してもらいたいのですが、重要な問題点のいくつかについて、特に注意を喚起するために、ここでも説明しておきたいと思います。

●望まない妊娠を避けるために、毎日、必ず、同じ時間に、忘れずにピルを飲むという習慣をつけるのは、大変なことです。性活動が最も活発な若い人達とは言え、そこまで頑張るほど、日常生活の中に性交渉が定着しているのでしょうか。

と、いささか皮肉を込めてみましたが、それ程多くない性交渉のために、その時に備えて、きちんとピルを毎日飲む程、若い人達が必要性を感じ、自分の性の健康を守る意識をしっかりと持っているのだとすれば幸いなことです。かなり努力し、辛抱のいることですが“備えあれば憂いなし”を心にしっかり植えつけておかなければならないことです。

●ピルを服用しているので、妊娠の心配がないのに、パートナーにコンドーム使用を求めにくい!!

ピルで妊娠は避けられても、性感染症の危険は全く予防できません。そこで、お互いに性感染症にかかっていないことが確実でない限り、コンドーム使用は絶対必要です。相手

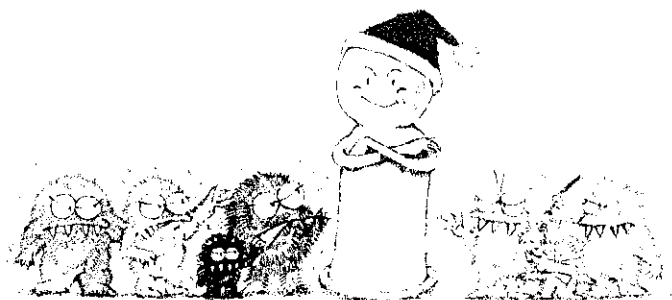
ピルの認可に引き続き、“女性用コンドーム”が日本でも認可され、既に発売されています。これまで、男性に依存せざるを得なかったコンドーム使用が、これによって、“女性自身の意志で使用できる”ようになり、避妊と性感染症予防に新しい意義のある選択肢が増えたことも知っておいてください。

そして、ぜひ、女性が自主的に女性用コンドームを使って、自らの“性の健康”を守ることを確実に実行してほしいものです。

を性感染症freeであると信用していないと思われたり、失礼な問題であり、せっかくの仲が壊れることが心配で、コンドームをなかなか言い出せないという話はよく聞くことです。

そのようなことのないように“ピルを服用していることを相手に言わないようにしよう”とか、“今日は飲み忘れたので……と言いましょ”、などと話す人もいます。しかし、そのような姑息な手段を使わないで、コンドームを使用するように、堂々とお互いに話し合っ、コンドームを使用するようにするにはどうすればよいのか、当事者が考えておくべきではないでしょうか？ よく“性の自己決定意識”の向上が言われるのはそのことです。

また当然のことながら、男性も女性側から言われなくても、使用する心がけをエチケットとして持つべきでしょう。実際問題として、今や“無症候の性感染症の女性優位の時代”ですので、症状のないパートナーとの関係から尿道炎になる患者が少なくないことを、忘れないでいてほしいと思います。男性側も自らの性の健康を守るために、コンドーム使用



ゴムの衣(コンドーム)を着ていると、怪獣(病原菌)どもと一緒になっても平気で身を守れますよ

が必要であることを覚えておかねばなりません。

お互いのために、温かい思いやりとしてコンドームを着けることが、今や時代に即した“ファッションナブル!!”であるような風潮を、是非醸し出してもらいたいものと願っています。“パパ・シャツ”という言葉で無粋な下着も流行したとのことなので、コンドームも“ペニ・シャツ”と言って、はやらせたらどうでしょうか。コンドームを使うことは、今や“思いやりのある男らしさ”の証しといっても良いのです。

●ピルは本当に性感染症に関係ないのでしょうか？

よくピルは避妊のためのホルモン薬剤であり、服用したことで性感染症に罹りやすくなることはない、性感染症流行とは関係ないと言われています。

ピル服用により、子宮頸部が感染し易くなることはなく、かえってクラミジア感染が子宮の中深く侵入し難くなり、骨盤内感染症発症を低くするとさえ言われています。

しかし、実際は、ピルの中に含まれる女性ホルモンで、局所の感染反応がおさえられ、感染による自覚症状の出る割合が低くなり、骨盤内感染症に広がっているにも拘わらず、あまり自覚症状が出なくなるため、それと気づかないようになることが、最近の研究で明らかになっています。この研究が殆ど無視されて、骨盤内感染症が少なくなるというのは不

思議でなりません。ピルの研究者の人達は、あまり感染症関係の論文を読まないからなのでしょうが？

●ピルで避妊出来ると安心して、避妊のために使っていたコンドームを使わなくなる可能性はありますか？

性感染症のことをあまり心配しない人達は、ピルで妊娠の心配がなくなったので、コンドームからも解放されたし、安心だからといって、より自由に積極的に、性交渉を持つようになりはしないかと心配もされています。そのようにコンドーム使用率が下がり、しかも性の自由化が、より進む結果として、ただでさえ、現在流行している無症候の性感染症群が、さらに大きく広がりはしないかと、かなり心配されています。

その心配のため、厚生省によるピルの解禁も遅れたと言ってもよいわけです。本当にその心配はないのでしょうか。しかし、性感染症の怖さをピルを服用する人に充分啓発すれば、その点を皆自覚して避妊は避妊として、性感染症感染予防にはそれなりに、コンドーム使用に心がけ、気を付けるから、そんな心配はしなくても大丈夫という主張が通って、ピル解禁になったのです。ピルを服用する人達がこのことを充分わきまえた上で、本当に自分の健康を守る為に性感染症予防に心がけてもらいたいものです。

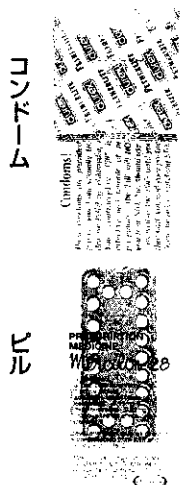
ピルもコンドームも —コンドーム使用は“本当の愛のあかし”

ここまで説明してくると、避妊のためにはピル、性感染症予防のためにはコンドーム、両者の併用こそ、性の健康を傷づける“性の影”から身を守る、唯一の方法であることがわかりただけだと思います。

パートナーを愛しているから、信頼しているからといっても、“愛や信頼”では性感染症は決して防げないことをよく覚えておいてください。

事実、ヨーロッパのピルには、左図のようにコンドームと一緒に包装したものが発売されており、日本も是非見習ってほしいものと感じています。

勿論、完全に安全な人同士のセックス以外は慎めと、主張する人もいます。しかしこれは、若い人に、車は危ないから乗るなどと言っても、自由に乗りたいたいのを簡単に止められるものではないと同じようなことで、なかなかむずかしいことです。むしろ、運転するなら、安全のため必ず免許証を取り、交通規則をしっかりと守ることを約束させると同じように、性交渉にはいつも“ピルもコンドームも”ということ徹底させることの方が、より現実的な指導方針といえましょう。別に放任する訳ではありませんが、



ピルとコンドームが一緒に包装された製品

若い人達に、誰のためでもない、自分自身の性の健康を守るために、正しくコンドームを使用する、という予防の原則を、必ず守るようにしてほしいと思っています。

そしてたびたび述べてきましたが、何よりも、この性感染症が、今や、性生活をもつ人なら、誰がかかってもおかしくないほど、性生活の環境汚染的な流行をしているのが現状なのです。お互いに、現在全く性感染症freeであるという保証がない限り、エチケットとしてコンドームを使うことが、パートナーへの“本当の愛のあかし”であると言えますか？ 避妊のためのピルとは関係なく、コンドーム使用は、性交渉時のお互いの愛の思いやり、守るべきルールである訳です。丁度、ピルを飲むことが、免許証を持つことであり、コンドームを使うことが、車の

運転の時に、交通規則を必ず守ることに通ずるのです。平気で赤信号の交差点に突っ込むようなことは、絶対に避けたいものです。



お互いに性の健康を守るために
正しくコンドームを使用するのがSTD予防の大原則
(愛情や信頼だけではSTD予防はできません)

ピル処方時、自分の為にクラミジアの検査を

最後にもう一つだけ付け加えたいことがあります。

ここまで説明して来たように、無自覚のうちに無症候の性感染症、ことにクラミジアに感染している可能性は、性生活をもつ若い人達にはかなり高いのです。ことに性生活が活発で、パートナーの多かった人は、4~5人に1人くらいというほど、極めて危険なのです。

その、気づかないクラミジア感染を放置しておくと、骨盤内感染症になり、いろいろ問題を起こし、また“不妊症”に数年のうちになる可能性もあるのです。またさらに“エイズにも3倍も4倍も罹りやすく”なっていることも忘れてはなりません。

そのため、男性にくらべてクラミジア感染率のかなり高い性生活を持っている若い女性の人達は、自ら進んで、定期的に検査を受けてもらいたいと思っています。誰のためでもなく、すべて自分のためである訳です。感染が発見出来れば早く治療が出来、将来悲しい合併症に苦しむこともなくなります。ま

た、知らないで自分の感染をパートナーに移すこともなくなり、社会的責任ある人間としての自覚をもつ必要もありましょう。

しかし、何も自覚症状がなく、健康だと信じている若い人達が、わざわざ時間を作って検査に病院へ行くことは、たとえ頭で理解していたとしても、実際になかなか無理な話といえましょう。

ただ、どうしても医者に行きたくなくても、少なくともピルを服用しようとする女性の場合は、処方してもらいに医師を訪れることとなります。性生活を持っていることは、感染の可能性の高い生活をしているとも言えます。そこでピル服用のために受診する機会を利用し、自分からクラミジアなどの検査を受けてもらいたいのです。ことに前にも説明しましたが、クラミジアは女性が男性より2.3倍も罹患率が高く、しかも若い人達では特に女性優位の感染症になっていることを覚えておいて下さい。

欧米の先進国では、少なくとも24歳以下の女性は

受診時には定期的に検診するように、国の公衆衛生機関からのガイドラインに出ていますし、最近では30歳以下まで広げるようになりつつあります。そして先進国の女性も、皆検診は当然のこのように思っているとのことです。

ただ女性にとって、何も異常はないと思っているのに、検診台に上るような検査は耐えられない、という人が殆どでしょう。そのため最近では下図のように、簡単にタンポンを入れるように、自分で綿棒を性器に入れるだけで充分検査出来る、優れた方法が普及しています。もちろん、そのような簡単な検査でも、しっかりクラミジアを検出できる高感度の検査キット（PCR、LCR）を使わなければなりません。（なお、それでもいやという人のために、欧米では、かなり検査の精度が落ちますが、尿による検査もあります。しかし、これでは3分の1の人が見落とされますので、綿棒での検査をぜひ受けてほしいものです。）

今や、殆ど不快な思いをしないで検査が出来るのですから、是非ピルをもらう時は、少なくとも1回は検査を受けてください。そしてパートナーが変わったり、複数いる人は、その都度、検査すべきでしょう。

よく費用のことを問題にする人がいますが、さして高額でもないし、何よりも大切な、かけがえのない自分の身体の健康のためであることをよく考えて

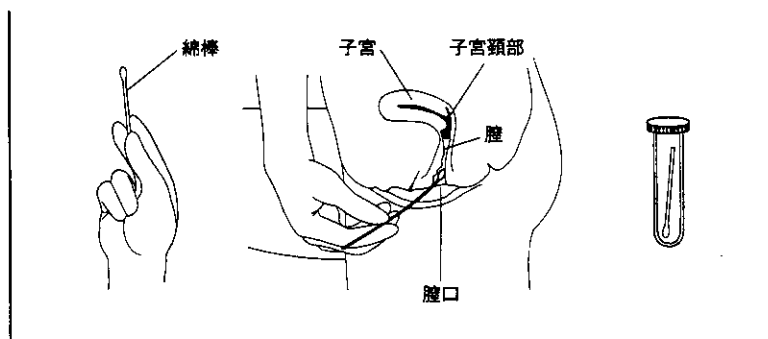
ほしいものです。勿論、ピルを処方する医師側も、積極的に検査をするようにすべきであるといえましょう。

なお、男性側にも当然、同様に積極的に検査を受けるべきだ、との声がかかり聞かれます。しかし女性のように、ピルのために受診する理由のない若い男性に、検査のためだけに医師を訪れさせることは、事実上不可能と言わざるを得ません。女性でもピルという理由がなければ受診したがるから……。

そこで、少なくとも女性側が無自覚のうちにクラミジア感染をしていることが診断された時に、そのパートナーにも確実に受診させ、感染していれば一緒に治療するようにすることが、現実的な男性側への検査普及の方法ではないかと思えます。他に啓発の方法があり、男性側の積極的な検査意識を高めるようなキャンペーンが出来れば別ですが、現実には大変難しいことです。大流行しているクラミジアの無自覚感染をチェックして、自らの“性の健康”を守り、またエイズ感染の可能性を予防しておくべきであるという考えが普及すれば、そうなると思っていますが……。そのようにしているうちに、男性側も積極的に検査を受けるような風潮が定着してくるのではないかと考えています。

本当は、生殖年齢の男女は、その性生活の内容に応じて、定期的に検査を受けるべきでしょう。

クラミジア自己検査キット



自分で膣の入口をこするだけで簡単に検体がとれるので、検査に嫌な思いをしなくてもすむようになっています

憂うべき日本の性感染症大流行の現状を考えよう

現在の学校での性教育では、男と女の性が、医学的に（解剖学的・生理学的）どのようなものであるかとか、“性の光の表”の部分についてはかなり詳しく教えても、この本で述べている、性行為にまつわる“裏や影”の問題について、殆ど教えられていません。当然、その“予防につながるコンドーム使用法”などについては、極めて不十分なことしか説明されておられません。

たとえば、エイズも性感染症としての話より、薬害エイズや人権問題に力点をおかれています。また、今大流行している性感染症のクラミジアなどは、高校3年生においてさえ、名前を知っているだけでも僅か1割にとどまっているという教育内容です。半分近く性経験をもっている状況にある高校3年生でも、クラミジアについて知っているのは5%くらいしかいません。

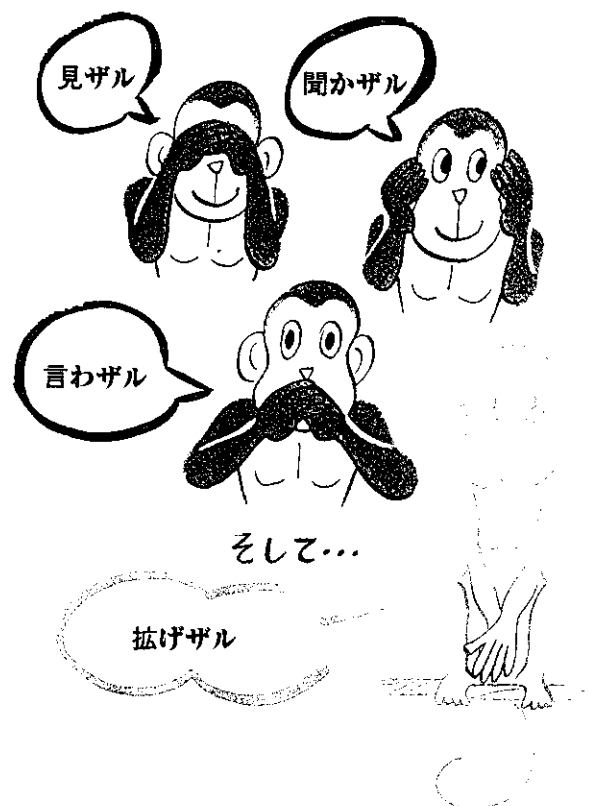
性感染症の恐ろしさ、また、無防備での性交渉で皆がすぐに感染する可能性が高いことなど、殆どが知られておらず、若い人達が性感染症をあまり心配していないのも不思議ではない現状なのです。

是非、若い人達が性感染症についての知識を深めて、その恐さを知り、予防の必要性を充分理解してほしいと願っています。教育関係者やPTAの方々が、危機感を持つべきではないでしょうか。教育の現場で、しっかりとした詳しい性感染症の知識と正しいコンドーム使用法を教えるべき時がきています。

流行が著しいと強調してきたクラミジア感染ばかりでなく、日本以外の世界の医療先進国で、すべて減少傾向にあるとされている、古くからある性病・淋菌感染症さえ、日本では現在、感染者が増加している現状は、いくら強調しても少なすぎるくらい、大変な問題なのです。

これは、国をあげての性感染症への“あきれるばかりの危機感のなさ”の結果なのです。この性感染症の大流行の波に乗って、エイズが大きく広がる可能性はかなりあるわけです。国際的な常識として、はっきりと淋菌やクラミジアの感染流行を抑えることが、すなわち、エイズ流行予防対策であるとされています。そのことから考えると、日本の現状は、エイズ流行拡大の可能性を秘めた、かなり危険な状況にあると言ってよいのです。

是非、このパンフレットを読んだ人達が、その点を考えて上で、自らの性感染症の予防を、すなわち、正しいコンドーム使用を心がけ、予防対策を常に実行してもらいたいものと願っています。



<現代は四猿時代>



財団法人 性の健康医学財団

Japanese Foundation for Sexual Health Medicine

身近に広がる性感染症／エイズ
若い人達の“性の健康”を守るために

著者 熊本悦明

編集・発行 財団法人 性の健康医学財団

〒113-0033 東京都文京区本郷3丁目14-10

泰生ビル5F

Tel: 03-3813-4098 Fax: 03-3813-4107

Email: info@jfshm.org

URL: <http://www.jfshm.org/>

© 2000 printed in JAPAN

印刷・製本 株式会社 バピルス

増える性感染症
若者向けに解説

小冊子出版



性の健康医学財団(東京)ではこのほど、若い女性に広がっているクラミジア、性交渉での感染が増えているHIV(エイズウイルス)感染など性感染症について分かりやすく解説した小冊子「若い人達の『性の健康』を守るために」Ⅱ写真Ⅱ(A4判、24頁)を出版した。希望者に一部300円(送料別)で配布している。

執筆を担当したのは、札幌医科大学名誉教授で同財団会頭の熊本悦明さん。症

状が出やすく早めの治療が可能だった梅毒やりん病などと違い、クラミジアや性器ヘルペスなどウイルスによる性感染症は感染に気づきにくく、まん延しやすい。熊本さんは性感染症の知識を持ち、コンドームを正しく使うことなどを呼びかけている。問い合わせは、同財団(03・38013・4060)まで。

読賣新聞, 2000年(平成12年)12月30日

これからの性の健康を 促進するために

日 時：2月23日（金） 午後6時～8時30分（開場 午後5時30分）（入場無料）
会 場：主婦会館プラザエフ（地階）国際会議場（JR/地下鉄四谷駅前〔麴町口〕）
（TEL：03-3265-8111）

「性感染症（STD）が今や大流行している」との理解は、医学界はもとより、一般社会の方々にも、かなり認知されつつあります。今“老いも若きも性の活発化”が見られ、ことに“若い世代の性感染症の浸透は著しい”ものがあります。特に、女性の生涯に及ぼす影響を考えると、早期の対策が必要であります。わが国の性感染症/HIV 感染の流行を、もう少し真剣に考え、STD に関する啓蒙活動の必要に迫られています。

そのような現状を踏まえつつ、私たちは、医学やジャーナリズムなど多方面から、STD/HIV 感染問題を考えるための研究班を組織し、研究をしております。このセミナーは、従前からの他の研究班の成果なども踏まえつつ、厚生科学研究の一環として開催いたします。

コーディネーター兼司会 堀口 雅子・池上千寿子・東 優子

開始	終了	スケジュール
17:30		開場（受付開始）：（机つき100名、イスのみ50～60名追加可）
18:00	18:05	開演挨拶 熊本 悦明（（財）性の健康医学財団会頭）
18:05	18:25	第1部 臨床の現場からみた性の健康を害するもの 司会 堀口 雅子（性と健康を考える女性専門家の会会長） ①性器ヘルペスについて 本田まりこ（東京慈恵会医科大学皮膚科）
18:25	18:45	②クラミジア流行の現状 早乙女智子（NTT 東日本関東病院産婦人科）
18:45	19:05	③エイズの現状について 源河いくみ（国立国際医療センターエイズ治療研究開発センター）
19:05	19:15	▼ コーヒーブレイク
19:15	20:30	第2部 パネルディスカッション～性の健康をどう促進させるか パネラー 東 優子（ノートルダム清心女子大学助教授：進行役） 池上千寿子（ぷれいす東京代表） 堀口 雅子（性と健康を考える女性専門家の会会長） 巴 ひかる（東京女子医科大学第二病院泌尿器科） 本田まりこ（東京慈恵会医科大学皮膚科） 早乙女智子（NTT 東日本関東病院産婦人科） 源河いくみ（国立国際医療センターエイズ治療研究開発 C）

主 催：厚生科学研究「STD/HIV 予防啓発に関する研究班」（主任研究者・熊本 悦明）
後 援：（財）性の健康医学財団、性と健康を考える女性専門家の会、日本性感染症学会
事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷 3-14-10 （財）性の健康医学財団内
TEL：03-3813-4098 FAX：03-3813-4107 E-mail：s t d@mu.j.biglobe.ne.jp

「STD/HIV 予防啓発に関する研究班」研究者

熊本 悦明	(財)性の健康医学財団 会頭
島崎 継雄	日本性科学情報センター 所長
行天 良雄	NHK OB、(国際医療福祉大学教授) 評論家
小谷 直道	読売新聞大阪本社 取締役 編集局長
大熊由紀子	朝日新聞社 論説委員
南谷 幹夫	東京都立駒込病院 東京都非常勤医員
川名 尚	帝京大学医学部産婦人科 教授
木原 正博	京都大学大学院医学研究科 国際保健学講座 教授

○ 参加申込み方法

当日会場へお越し下さればどなたでも参加できますが、座席の都合から、必ずファックスまたは E-mail で下記宛予め送信してください。(参加申込み者多数の場合は抽選となります。)

送付先

〒113-0033 東京都文京区本郷3丁目14-10 泰生ビル5F

厚生科学研究「STD/HIV 予防啓発に関する研究班」事務局

(財)性の健康医学財団内 担当：川崎、水野

TEL: 03-3813-4098 FAX: 03-3813-4107 E-mail: std@muji.biglobe.ne.jp

厚生科学研究「STD/HIV 予防啓発に関する研究班」

公開セミナー参加申込書

下記に必要事項をご記入の上、FAX または E-mail でお送りください。

● 参加者名	フリガナ	<input type="checkbox"/> 女性 / <input type="checkbox"/> 男性
	フリガナ	
● 会社名 または 団体名		
● 住所 (連絡先)	〒	
	TEL:	FAX:
	e-mail	

当日のスピーチ、配布資料等については、取材・引用自由です。

ただし、厚生科学研究によると注記してください。

がんばれ！サラリーマン

STDまん延ハイピッチ

100万人感染 性病の症状と治療法

わが国では3年前からSTD(性感染症)の流行状況を把握するため疫学調査が行われている。対象となる8つのモデル県の人口は3000万人強で、泌尿器科、産婦人科、皮膚科などの医療機関、人口構成などから、国内の現状をほぼカバー。1999年には、新たにトリコモナス症も加わった。

15歳から50歳

研究班の班長で性の健康医学財団の熊本悦明会頭は「推計では、最も多いクラミジア感染症だけでも男性が約14万人、女性は82万人もいる」と警告する。淋病は調査からわずか1年で、STDに関する知識不足も

男性の思いやりが防ぐ

淋病 1年で女性の68%急増

ることを報告。背景には男女間の意思の疎通のなさを指摘した。「いわゆる風俗業の女性よりも未婚女性の妊婦のほうが感染率が高い。パートナー同士、つつみ隠さないことが大事(早乙女さん)。とはいえ複数のパートナーを持つケースも多く、避妊を含め、STDに関する知識不足も

コンドームなしはハイリスク

活動するNPO(特定非営利活動法人)「ぶれいす東京」の代表を務める池上千寿子さんは、「妊娠ない思いやりを持ってほしい」と話す。STDは、いわば性の影の部分。男女がそれぞれの健全な性について問い直す時代にある。(倉西隆男)

男性31%、女性68%という急増ぶり。これは男女とも15歳から50歳まで共通した傾向という。

風俗女性よりも

感染のハイリ

速因のひとつという。また、国立国際医療センターの源河いくみさんは、HIV感染・エイズ増加の問題に触れ、「コンドーム無しでセックスする人は、もはやHIVのハイリ

ではないか」。

池上さんらは、このほど、若者に受け入れられやすいよう6穴バインダーに閉じ込めるパンフレットを作った。「男性から、コンドームを使おう、っていわれると、女性からの評価はグンと上がるんです。女性には、安心できればもっと感じる事ができるんです(池上さん)。「性と健康を考える女性専門家の会」の堀口雅子会長は、「女性は常にどう

II. 公開講座

「性感染症／エイズ流行の現状をどう考えるか」

記 録 集

厚生省「STD/HIV 予防のための啓発活動に関する研究班」

〔第 1 回公開セミナー〕

性感染症／エイズ流行の現状をどう考えるか

日 時： 11 月 24 日（金） 午後 4 時 30 分～7 時（開場 4 時）

会 場： 学士会館（2 階）大会議室 210 号室

東京都千代田区神田錦町 3-28（TEL: 03-3292-5931）

北側（駐車場のある入口）神保町寄りの入口をご利用下さい。

***** 公開セミナー・スケジュール *****

開始	終了	スケジュール
4:00		開場（受付開始）：於 210 号室（大会議室）
4:30	4:35	開演挨拶 厚生省結核感染症課長 中谷 比呂樹氏
4:35	6:00	第一部 公開セミナー 司会 島田 馨（前日本感染症学会理事長・東京専売病院長）
4:35	5:00	①日本における性感染症流行の現状について 熊本 悦明（(財)性の健康医学財団会頭）
5:05	5:30	②日本におけるエイズ／HIV 感染流行の現状 岡 慎一（国立国際医療センター臨床研究開発部長）
5:35	6:00	③日本における若者の性生活の実態について／エイズ・性感染症との関 連について 木原 正博（京都大学大学院教授）
6:00	6:10	Q&A 及び休憩
6:10	7:00	第二部 パネル・ディスカッション～STD/HIV を多角面から考える 司会・コーディネーター 小林 照幸（ノンフィクション作家） パネリスト 島田 馨（前日本感染症学会理事長・東京専売病院長） 熊本 悦明（(財)性の健康医学財団会頭） 岡 慎一（国立国際医療センター臨床研究開発部長） 木原 正博（京都大学大学院教授） 南谷 幹夫（都立駒込病院、元杏林大学医学部教授） 田宮 次郎（「ナイツスポーツ」編集局社会部次長）

何かご質問等ございましたら、下記宛ご遠慮なくお問い合わせください。

厚生省科研費「STD/HIV 予防啓発に関する研究班」事務局 川崎／水野

TEL：03-3813-4098 FAX：03-3813-4107 E-mail：std@muji.biglobe.ne.jp